

武
相
論
壇

本稿は鈴木先生が、讀賣新聞神奈川讀賣面「武相論壇」に、昭和十五年十月三日より十六年一月二十三日にわたり、約十回投稿されたものである。

當時混沌たる國際狀勢裡に五里夢中の國民に對し、先生の熱烈なる忠君愛國の至情の一端が本稿を投ずる所以となつたもので、公明正大にして峻烈な時局評は必ずや讀者の肺腑をつくものがあつたであらう。

往くところまで

お互ひ肚の探り合ひと言ふものは洵に氣持の悪いものである。沉んやそれが國際的のものである場合、その不愉快さは何んとも言へぬ鬱陶しいものである。この苦い體驗を散々背負はされて來ただけに、今度の三國同盟は、この頃の秋空にも似た晴々しいものである。

三國同盟の功德は、肚の探り合ひを清算して、敵か味方かの、劃線をはつきりした一點だけでも、この條約の成立を謳歌するに十分であり、これで正體の摺み難い近衛新體制も誤認の餘地がなくなつて、國の嚮ふ所、國民の進む道が不動不退轉となつた譯である。

新體制はどうも判らないと言つた話を隨所で耳にした。と思ふと忽ちこれで全貌を摺み得たと言つた顔をする者も少くない。

勿論判らぬより判つた方がよいのであるが、かう判らなかつたり判つたりすることは、つまり時局認識の不備から來る缺陷を意味するものと言はねばならぬ。

今日あることは、決して籤から棒の話ではなく、パネー號事件にしたところで、その後の日米

外交の經緯にしたところで、將又天津問題、廣東攻略にしろ、その一つ一つが因果であり、暗示であつたことは言ふまでもないことである。

若し事の真相を把握して、その後に来るものゝ見透しと、それに對する決意が固められてゐたならば、今更ながら、萬民翼賛や一億一心の結束を強調する必要もなかつたのではあるまいか。新體制も高度國防國家もさることながら要は國民一人々々の認識と決意に倚るの外なきことは、この一事を見ても瞭かなことである。

この秋問題となつて來たのが、國民組織の新體制であり、當路でも色々考究せられてゐるが、これは別に兎や角言ふまでもなく、我國には古來嚴として、一君萬民の國民組織が千古不磨の磐石上に打ち建てられてゐる。國民は惑はず憚からず信ずるところに往けばよい。

新體制はこれからである。支那事變は單なる支那事變の解決に依つて、終結を見るものとは豫想することが出来なくなつた。第二次否第三次の事變すら想定すべき段階に入つたものと言はねばならぬ。

斯くて新大東亞の黎明を告ぐる曉鐘は高らかに響き渡り、茜に染めた東天からは燃ゆる太陽が躍動し來つた景觀を呈してゐる。

然し乍らこの多幸多望の裡にも、新生の陣痛として、我々は過渡期に於ける苦惱を嘗めざるを得ないのである。この間の矛盾と摩擦は十分覺悟を要するところであり、無血維新の意義の深き所以である。

既にして矢は弦を放れた。今は論議を許されない。ただ實行あるのみとなつた。我縣民諸君もこの目的完遂に當つて、あらゆる困苦缺乏に堪へ忍びつゝ、往くところまで往つて貰ひたい。

(一五・一〇・三)

原 三 溪 翁

三溪園の四季はそれぞれの風趣があるが、分けて私は秋の三溪園を愛する。

萩の花亂れ咲く池畔に、秋の既に酣なるを知り、原三溪翁を偲ぶの情轉々切なるものがある。

翁と親交の深かつた徳富蘇峰先生は、その死を悼むの辭に、翁の風采は何んとなく西園寺陶庵公の壯時を思はしむるものがあると記された。

私は頃來故小泉三申氏の著「隨筆西園寺公」を一讀して、先生の言の甚だ當れることを發見し

た。三申氏は晩年老公を屢々興津の坐漁莊に訪れて、公の生立ちより晩年に至る事蹟につき問答を重ねて、著書の資料としたものである。

私はこの著を読み三溪翁と屢々應接した時の感想とを照合して見ると、單にその風采のみに止まらずその心境に於て頗る酷似するものがある。

老公が三申氏と相對して、自らを語られる様子は、實に悠々迫らず、あの地位、あの名望を全く忘れた一個の人間陶庵になり切つてゐる。高踏逸人と言ふ感は、眞に公に於てこれを見得るのである。私はこの一點は、特に三溪翁の老公に相通するところであると信ずる。

翁は何時如何なる時でも、浮世の景氣や不景氣の風が、何處を吹いて居るのやら、一向知らぬもののやうであつた。

私は卅年の長きに互る交友中、ついぞその氣配その表情に接する機會がなかつた。

勿論翁は生糸貿易の巨商であり景氣不景氣に超然たり得る筈はないのであるが、翁は常に胸底深く何事も曇み込まれて、顔色に現されず、水の如く、鏡の如き平靜さを持してゐられた、あの修養の深さはたゞ敬服の外なき事であつた。特に彼の關東大震災に際して、翁は固執せられた主義を一擲して社會の第一線に躍進せられ、横濱復興會の會長として、熾烈なる氣魄と牢固たる決

意を示されつゝも、猶悠然たる餘裕があつた。

三申氏の如く陶庵老公に接近した他の一人は、竹越三又氏である。氏はその近著「三又小品」に於て三又氏の師事した陸奥宗光伯が、老公を評して、天下第一人高人であると言つて氏を紹介したのであつたが、老公に四十餘年の從遊中、公を知ること、この一語に盡きると言つてゐるが、私の三溪翁に對する感じも亦偶然相一致するものである。

三又氏は又言つてゐる「昔から君主に仕ふるの道に三あり、その一は權臣、その二は寵臣、その三は純臣である。老公は正にこの純臣である。」と三又氏は斷じてゐるが、私の三溪翁を觀ることに正にこの純臣たるにある。

翁は往年大宰相桂公が其の傘下に入らんことを慫慂したと傳へられるほどに、一面國士の風を具へてゐられたことは、今次事變勃發と同時に、翁の熱血は沸き、私の如きも屢々その片鱗に觸れ得たことであつた。

三溪翁が横濱の長老として、長い歳月に互つて市に對して採られた態度も、亦純臣そのものであつた。

斯くて翁はその雅號の三と同じ三の字を冠する三申、三又兩氏によつて、陶庵老公と性格的に

一脈相通するものあることを證せられ、蘇峰先生によつて相貌の酷似せることを記せられた。因縁の洵に奇しきものがある。

三溪翁逝いて早一年、今更の如くその死が悼まれてならないのである。(一五・一〇・一一)

忠 君 と 法 治

舉國以來我國家の組織は、確乎不動のものである。即ち一君萬民にして、義は君臣、情は父子である。これ我國體の精華にして嚴然千古不磨の磐石上に屹立するものである。

然してこの唯一にして、無二なる國民組織は、忠君の二字を守神として、一元であり一貫であるところの、國民最高道徳が打ち建てられてゐるのである。

この國民的最高道徳は時に光輝の消長はあつたが、封建時代の如き忠君が特殊階級の獨占的奇觀を呈した場合に於てさへ、大衆の最高道徳は依然として、忠君に歸一してゐるのである。

世は明治新政となり、天皇は神聖にして侵す可からざるの明文を拜して、茲に國民は舉つて、大政翼賛の恩典に浴することゝなつた。換言すると、萬民は一人残らず 天皇の統治召さるゝ鴻

業に御奉公申上げると言ふ態勢となつたのである。

この意味に於て、忠君は所謂四民平等に門戸を開放し、併せて機會を均等ならしめた次第である。爰に於て國民は、其職場に於て、自ら擔當する仕事を完遂することが即ち忠君の一途であり、臣道を全うする所以である。

これに反し苟も御統治の鴻業に對し、何等かの妨げとなることがあれば、正しく不忠であり、反逆の行爲と斷ぜねばならぬ。

この理念から、今日の世態を斷ずると、遺憾ながら不忠、反逆の暗影が餘りに濃厚なるに怖れざるを得ないのである。即ち闇取引、闇相場等の跳梁は正しくそれである。斯くの如きは果して、皇道精神を發揮し、萬邦比なき國體下の國民と自負し得るであらうか。

然もこれ等の違反者に對して、單に法を犯したものととして、法を以て處罰し、その處罰に服したることによつて、罪を解消したものとしてゐる。そこに重大な錯誤と過失のあることに氣がつかないのである。

忠君はわが國民道德の最高指標であり、同時に日常生活の規準でなければならぬ。神棚に拜すべきでなく、自ら身得せねば意味をなさないことである。これを日常の行動に盛り上げ、織込んで

でこそ、眞義を徹することが出来るのである。

この意味の忠君が、認識され、實踐されることは、今の世態では實に容易なことではないやうである。或は十年かゝるか、二十年を要するか分らないのであるが、然し國體精華の顯現の爲には敢然として努力を盡さねばならない。

これが爲には、文教に於ける一大刷新を待望することが洵に切である。

私は窃かに憂へる。『今日この場合、如何なる事が計畫せられ、又如何なることが組織せられようとも、若し我國體の眞諦を會得せずして、徒に他國の鑿に倣つて法治を第一義と考へるが如き思想で、支配せられる間は、我社會、我國家は眞の安定を見ることがないのではないか。』と、私の老婆心に終れば辛甚である。

(一五・一〇・二〇)

農村問題の緩急

傳ふるところによれば、石黒農相は自作農維持創設を根本目標とする農地調整令の改正に着手したが、成案を得次第準備を整へて年末中には農地審議會を開會付議する運びであるといふこと

である。

この内容の主點は、耕作せざる者は農地を所有してはならない。即ち所謂不在地主を一掃すること、農地の自由賣買を禁止することにあるらしい。この案は勿論、今次の新體制に順應する考へ方から出發したものであらう。

自作農の堅持と、その培養は我農業體勢上、極めて望ましいことである。従つてこの法案の意圖するところには絶對の賛意を表するものであるが、ただその手段としての農地の自由賣買禁止は果して如何なるものであらうか。

先づその第一の疑念は、自作農擁護に對し、それ程の必要があるかどうかと云ふことである。又農地の自由賣買禁止は、帝國憲法の尊嚴と何等牴觸するところがないかどうか、農地の價格には如何に影響するか、更に農民の心理はこれによつて將來どう動くか、少くもこの三點を慎重檢討しなければならぬと考へる。

總て、ものゝ改善には準備と順序がなければならぬ。準備と順序を飛越えた改善は、最早改善でなく他の言葉の埒内に入るべきものであると考へる。

農業農村には、火急を要する問題が眼前に山積してゐる。僅か二反歩の地主である私の經驗か

ら云つても、事變以來入手の困難となつた害蟲驅除劑、飼料、肥料等に對する應急措置に就ては、何等の指導啓發を受けたこともない。

私の如きでさへ困つてゐるのであるから實際の農村農家では大いに困つてゐる筈である。先づこの手近の問題から處理してもらつた方がどれだけ助かるか知れないのである。事變以來軍部では、國防や軍事に關するパンフレットを屢々刊行して、軍事上の理解を昂めてゐることは周知の事實である。農林省あたりでも、これに準ずる小刊行物によつて非常時農村を先導することも、差當つて實行されていくことである。

更に重要農産物の増産計畫や農村勞力の補強も大きい問題である。斯かる實際問題に就てもう少し突込んだ研究をして貰ひたいものである。農林省には色々な會議が續行されてゐるやうであるが、實際問題の擔當者である農事試驗場長などの會議は餘り開かれないうやうであり、大臣閣下の關心もさう大きいものとは見受けられないのである。

實際を離れた机上の空論は、何時の場合も避けねばならないのであるが、特に農事に於ては慎まねばならぬことである。いづれにしても、只新らしいといふことに急に於て、民情や國情を無視し、徒らに思想の不安混亂を醸すが如きことは、嚴に戒むべきであり、用語の如きも特に不用

意に他邦の模倣をなすことのないやう切望して止まぬものである。

(一五・一〇・二六)

ハマの安達さん

選挙の神様と言はれた安達謙藏さんがその内務大臣の在任中に、ハマの人となられ、しかも本牧八王子の絶壁上に、八聖を祀る八聖殿堂を建立せられたことは、洵に奇しき因縁と言はねばならぬ。

政治が自分の國家奉仕であり、終身の事業だと口癖のやうに言ふ安達さんが、一念發起して堂宇に聖徳太子、弘法大師、親鸞、日蓮、釋迦、孔子、キリスト、ソクラテスの聖像を彫鑄安置するに至つたことは、一見不可思議の對象にも考へられるのである。

然しこれは全く物の皮相な見方であつて、安達さんは、「自分は十五六歳にして、郷里熊本の漢學塾に學んだ頃から既に心底深く宗教的なものが潜在してゐた。それが五十餘年の歲月の間絶えず躍動し來り、遂に具體化したのが、この八聖殿である。自分は生ある間、この堂守となり、死後は殿堂及び敷地全部を市に寄付することを約束する」と、聲明されたのである。

安達さんが八聖殿と共に、横濱市に居を移されたことは實に意義深いことである。單に八聖殿が三溪園と共に遊覽の名所となつたことや、月例開會される八聖講演會の功德そのものゝ外に大きい業績が他にあると信する。

それはハマの名門名士が、ともすれば居を他に移す傾向は、彼の大震災を契機として一段の拍車を加へて來た。これには色々事情もあることであらうが、兎に角地の人々がハマを去つて寂寥を訴へる場合、安達さんが他から、移つて來られたことは、正に千鈞の重みを市の上に加へたものと言はなければならない。

これより先き安達さんは昭和六年の暮、民政黨の育ての親でありながら、憲政常道を破る協力内閣を提唱して、時の若槻民政内閣を瓦解せしむるに至つたが、その九月には滿洲事變の勃發となり、英國が金の離脱をなすと言ふ二大事件が起つた。

當時安達さんに對する世評は紛々たるものであつたが、結果的に見て明かなる如く、安達さんは實に先覺者であり、既に今日の新體制の招來すべき確かな見透しをつけて居られたことが瞭かであり、今更ながら安達さんの悲壯なりし決斷に對し大なる尊敬を拂はざるを得ないのである。

然し安達さんのこの大きい犠牲的精神に酬いられたものは、爾來十年の長きに亙る政界の迷羊

生活であつた。それは恰も安達さんの親分である佐々友房の國家主義と其運命に髣髴たるものがあつた。これは先覺者の定められた運命でもあらう。だがこの運命に屈するやうな安達さんではない。年こそとつたが元氣は壯者を凌いでゐる。時代は安達さんの出幕を待つてゐる。蓋しこれからの安達さんの舞臺こそ觀物であらう。

有馬伯に聽く

この程のことである。ある婚禮に招かれたが、その席上媒妁人の挨拶が新體制づくめであつたのに少なからず驚かされた。が近頃の話題も用語は直ぐ新體制を持ち出されるには全く閉口する。併しその新體制とはどんなものかと反問すると、殆んど異口同音に實ははつきりしないのだがと言ふのである。この語源のはつきりしないことが、一面何にでも使ひ得ると言ふ融通性を生ずる所以でもあるのだ。

私は最近東京の或會合で、新體制の神様とも言ふべき、有馬頼寧伯から二時間餘に亙つて所信を聽く機會を與へられた。

伯は話の劈頭において、經濟と教育は急激な變化を慎まねばならぬ。と言はれた。又この體制がどんな風に出來上るか、その具體的のことは申上げられないとはつきり言はれたのである。

そこでこの新體制は、世間で取沙汰せられてゐるところと、矢張り同じことだと言ふことが私にも首肯せられたのである。

有馬伯の話は終始概念的なものであつた。これは一つには伯が極めて大事をとつて話されたことにも起因するであらうが、兎に角伯の口から直接話を聽いて、私の最も關心を持つたことは、この新體制の生れ出でた経路であつた。

伯の舊藩士に眞木和泉守と云ふ志士があり、明治維新の大業は、和泉守の勤王運動に負ふところ實に多大であるが、この明治維新以來、第二の維新を招來すべき情勢が漸次濃厚となり、特に今次專變を契機として遂に表面化を見るに至つた。

即ち昭和十一年伯等同志は、荻窪の伯邸に相集つて、其所信を固めた以來の運動が、今日の新體制の形態に於て結實したものであることを、伯は洵に率直に陳べられたのであつた。

この新體制の起るべくして起つたことに對しては、異論を挿む餘地はないことである。しかもその陣容は既に成り、天下の智謀を蒐めつゝも、今猶その實體を闡明することが出來ず國民をし

て動もすれば不安と焦慮を感じしめつゝある。

況んや邦家の安危にかゝはる事變の解決、並に空前の重壓下にある國外情勢に對しては、何等信倚すべき發展を示されてゐないのである。事態はこれによいのであらうか。

昔は内政の困難なる場合、國民の視聽を強ひて國外に轉ぜしむる爲に、外國と事を構へる手は屢々用ひられたところである。然るに我國の現状はこれが逆手を行つてゐるのは特に注目すべき點であると考へる。

伯は今次の新體制が明治維新と同じく下から盛上る力に待つべきであつたが、事急な爲に政府がその代行をしたものだと言はれた。或はさうであつたとは考へるが、又一面から見て、これが爲に官製維新となり、行き過ぎとなつた事實も否み得ないことである。

伯の所説中私の最も満足に思つたことは、終始一言半句も自由主義や民主主義乃至全體主義に及ばれなかつたことや、他邦のイデオロギーを一つも引用されなかつたことである。

新體制には色々都合のあることであらうが、よく其緩急を考へて先づ其急なるものを先にして貰ひたい。それには現實の支那事變の解決と、緊迫した國際關係のこの二點より先なるものは外にあるまいと信ずる。私は政府當局が何よりこの二問題に全智全力を傾倒せられんことを熱望措

かぬものである。

(一五・一一・七)

市と科學研究所

近代生活は科學であり、都市生活は科學である。この意味に於ての市電、市バスの交通機關を始め市瓦斯、市水道、官營の電信、電話、私營の電燈、電熱等一として科學の所産ならざるはない。若し之等の科學的施設を除いたならば恐らく市及び市民の文化は根柢より奪ひ去られるであらうことは、彼の大震災火災に於ける一時的現象によつても容易に首肯し得られるところである。

併しこの文化の恩人も、餘りに身近くにある爲に、却つてその存在價值を忘れ勝ちであり何かの事變に乗上げてその功德を再認識すると言つた矛盾の苦杯を嘗めることが屢々である。近頃高唱せられる高度國防國家の建設と言ふが如きも、稍その憾みなしとしないのである。科學の取扱ひ方は、果してそれでよいのであらうか。

元時代の支那は遠く西歐諸國をさへ征服して、世界的霸王となつたものである。然るに今は主客地を顛じて西歐諸國の願使に甘んじ、東洋中獨り我大日本帝國が巍然たる國體を堅持するに過

ぎないのである。印度に於ける憂國の士が奮起して、排英運動に身を投じ、或は支那の思想家が、支那文化の泰西文化に對する優越性を高唱するのも、總ては時代の反動から來た當然の事象と言はねばならぬ。斯かる優越せる獨自の文化を所産しながら中世以後に於ける東洋諸國が、白人を目して優秀なる國民なりとする誤つた尊敬を拂ひ、國家としても、個人としても全く白人及び白人國に對し奴隸的惰伏を取てするに至つたことは、洵に愚も亦甚だしいものであつた。

併しこの奴隸的惰伏の内容的檢討をして見ると、これは單なる人種的の誤認ではなくして、實に彼等の有する科學の偉力に惰伏を餘儀なくせられたものと些か同情を傾けざるを得ないのである。彼等は實に科學を武器とし、科學を前衛として旗鼓堂々と東洋に進出したのであつた。

我國が西歐諸國に伍して嶄然として頭角を現はし、正に群鷄の一鶴たるものは、これ亦實に科學を有し、科學を以て相對峙するが故である。併し又翻つて我科學及びその應用の進歩發達の跡を顧みると遺憾ながら西歐諸國に比して立ち後れであり、彼に一籌を輸せざるを得ないのである。即ち我國は科學的債務國の立場にあるものと言はなければならぬ。

科學に於ては言ふまでもなく、創意、創造が必須要件である。又科學の應用と効果を顯著ならしむる爲には、何を措いても研究第一主義でなければならぬ。

この意味に於ける科學の進運を欲求するには、科學の參謀本部である科學研究所の設立を普及しなければならぬ。獨逸に於ける科學の目覺しき急進は、科學研究所の功績に歸すべき多くの理由がある。我國に於ても最近廿年の間に工業の發展と、これに伴ふ大規模工場の設立あり、之に付隨する研究所の設立を企圖するものが斷然その數を増しつゝあるのは、我科學界の爲に眞に慶賀に堪へないところである。

然るにこの科學の恩惠を最も多分に甘受しつゝある我國の各都市に於ては、未だ市立の科學研究所を擁するものが一つも數へられないのは甚だ遺憾千萬である。

我横濱市は、由來文化の輸入港たるを誇りとし、又生命としてゐるのであつて、科學に對する關心も最も多い譯である。特に昨今の市の情勢は東京開港問題を繞つて歴史的大轉換を強要せられつゝある。この秋に當つて科學研究所の使命は、必ずや大なる示唆を與へ得るものと信じて疑はないものである。

地位的に言へば、既に横濱市は縣立工業試験所を有してゐるが、縣立には縣立の特長があり又同時に缺陷もある。市立たるにはその眼目が市及び市民と言ふ特定せられたる範圍に於て獨特の行き方と効果を擧げ得られるところに、一新生面と洋々たる科學の海が拓けてゐるものとして、

多幸多望の前途に囑望されるのである。切に當路者の一考を煩したいと考へる。

東京開港如是我聞

東京開港の問題で我横濱市は近來にない大騒ぎである。無理のない事である、東京に開港されては我横濱港に影響を與へることは多大であらうから、我市民は何人も東京の開港を欲しないであらう。

此問題のそも／＼の起りは大正の大震災である。當時暫くの間横濱港は其用を爲さなかつた爲に我港に着すべき或る船舶は品川まで深く入つた。入つて見ると存外便利である處から東京側が其處に初めて野心を起して來たと見える。

一體船主側から云へば港は横濱とか東京とか云ふ區別がなからう。どちらでも貨物の積み卸しの多い便利な事と同時に乗客の便利で多い處が好ましいのが自然の事であらう。之が眞實とすれば今日の東京としては開港を欲する多大の理由がある。

横濱側としては東京開港は勿論絶對反對である、しかし横濱は開港の權益を獨占すると云ふ事

は新體制の公益優先の根本義に矛盾するに非ずやと新體制政府からのお叱りがあるかも知れないが、まだ新體制の訓練が未熟であるから其處は暫く見逃しをしてもらひたい。

東京開港を實行せんとすれば横濱側が大騒ぎをすることは火を賭るより明かな事である。然るに現下の國狀に直面すれば開港問題などを取り上げて彼れ此れする時局ではあるまい。我國の東西南北から襲來する戰時國際問題は支那事變と三國同盟に關聯して間髪を入れざる重大局面を展開しつゝあるにあらずや。當局の時局認識の不足に慨嘆する。此れは見逃すことの出来ない事である。宜しく此問題は白紙として棚へ上げて置くことを希望する。

同時に横濱の市民諸君に警告したいのは、東京開港は遅かれ早かれ何時かは事實となつて顯はれて來ると思ふ。開港是か非かの議論は双方に道理があるから畢竟水掛け論であるが、天下の大勢が開港に決するであらうと思はれる。

今日大西洋には三萬噸や五萬噸の巨船が往來してゐる。早晚太平洋にもその時代の來ることは明白である。東京開港が實現しても如上の巨船は品川灣には入ることは不可能である。東京開港承認の條件として五萬噸級の巨船が三隻でも五隻でも悠々碇泊出來る港灣改築をすべきであると
思ふ。

如何に港灣の設備が完備したからとて横濱市自身が貧弱であつてはお話にならない。今日横濱市とその背後の地域との交通状態を見ると横濱の發展し難きことは實に瞭然たるものがある。

横濱市に人や物資や金が流れ込む道路らしき道路が出来て居ない。特に厚木へ行く神中鐵道の貧弱さと來てはお話にならない。朝鮮の僻地か樺太邊まで行かねば見られない交通機關である。その上我横濱は帝都の隣接地であるに關せず、明治以來政府直轄の機關としては生絲検査所あるのみである。

往事は致方ないとして横濱市發展の前途には無數の好題目が横はつて居る。先手を打たれない事は縣や市の理事者の責任である。

徒らに目前の利害に齟齬として其日暮しをしてはならない。少くも十年や二十年の先の見透しをつけて我々を指導してもらひたい。眉に火が付いてから生存權とか死活問題とか、情ない悲鳴をあげさせぬ様十分の用意を怠らぬ様にして欲しい。

(一五・二二・一九)

太平洋波高し

空地利用の昌作りは、翼賛風景のうちにも微笑ましいものゝ一つである。昌作りを趣味とする私には隨所に同志の多くを持つことが殊の外嬉しい。而も此等同志が老人か若くは婦女子で、持ち馴れぬ鋤鍬を懸命に揮ふ眞剣な姿には、何人も時局を反映する緊張感を痛感する。

寸尺の土を惜しむ市中の情景から、眼を轉じて土のある地方を展望すると、即今不思議な現象が浮び出して来る。即ち元來土に生きるべき小作人が、地主に借地を返還し、土と縁切りをして工場街に轉出せんとする傾向があると傳へられることである。

近來工業が地方分散の形態をとつたことも、大きな誘引の力であらうし、色々算へあげれば夫の理由があることであるが、要するに百姓よりも工場が得であるといふの外には何もものもないのである。利害の詮索は別問題として、この食糧國策逼迫の折柄實に憂慮すべき事象といはねばならぬのである。

職域奉公が叫ばれ、公益優先が唱へられてゐる。これは決して空念佛やお題目ではないのであ

る。眞の一億一心は、此等の實踐に發足しなければ意味をなさないことは自明の理である筈である。小作人の職域は土地であり、奉公は耕作である。食糧の生産と其擴充は銃後我々の第一線であるべきである。

戰場で勇躍する子弟は其門出に當つて、銃後は宜しく頼むと言ひ、残る我々父兄は心配するな。銃後は引受けたと誓つて送り、又送られるのである。戰場に出て明日とも分らぬ生命をもともと考へず、銃を手にして敵に向つて居る。然るに耕作の職域で鋤鉞を捨てたとあつては君國の爲に實に相濟まないのではなからうか。成る程工場は百姓より得であるであらう。然し損得の問題ではない。銃執る覺悟で鋤鉞を執るべきでなからうか。

これは獨り小作人の問題のみでない。全國に横行するはてしない闇行爲の如きは、實に言語道斷である。君國に對する大なる不信であり又不忠であると斷ぜざるを得ない。等しく一君萬民の赤子である、假令一人を飢ゑしめても一人も不忠の子たらしめてはならないと、私は堅く信ずるものである。我國體の眞髓は茲にありと深く信ずる。

斯く考へ來ると政治と云ふものゝむづかしさを熟々考へさせられるのである。

日露戦役で旅順を攻圍した乃木將軍、滿洲戰野に於ける大山元帥は共に全國民から滿幅の信頼

を捧げられ、億兆其心を一にして國難を突破した。更に日清戰役を回顧しても同様であつた。當時の悲壯な舉國一致の決意は、今日これを想起するだに眞に痛快な感じがせられる。

聖戰今や第五年この間國際情勢は幾變轉して、遂に來るものは太平洋の怒濤であつた。我等は決して來るものを怖れるのではない。唯怖れるのは國民の時艱に對する認識と、それに對する用意である。認識に一日の遲疑あれば、即ち敵に一日を乗せしめ、用意に一刻の油斷あれば、即ち敵に一刻を乗せしむるのである。

古歌に「ひとかたになびき揃ひて花すゝき風吹く時は亂れざりけり」國民よ何を措いても戰時の體制に結束せよ、太平洋上に吹く風と荒れる浪を見よ。

(一六・一・一三)

この論説は一月二十三日付讀賣新聞の「神奈川讀賣面」に於ける武相論壇に「太平洋波高し」と題して私の執筆したものである。これに對して一無名氏からその翌日次の如き批評の一文を寄せられた。

讀賣の武相論壇に於て「農夫は損得を論ぜず國家的見地から農に従事せよ」と言はれますが、これはむしろ農夫のみでなく、教育ある方々に言はるべきことと思ひます。農夫には恩給があり

ませんから、自分で將來の生活の心配をしなければならぬのです。

恩給期限の來るのを待ち兼ねて會社入りをする教育者や官吏が多いのではありませんか、そして國家の財政上の負擔を一層重くさせるのです。農夫ばかりではありません。大學生だつて、卒業に際しては最も自己の生活に有利なところへ就職せんとするのではありますまいか。教員だつて、少しでも待遇のよい所へ就職せんとするでせう。

科學の振興には技術家、科學者の待遇をよくすることが第一と言はれるのは何の爲です。教育の振興には必ず教育者の待遇向上が叫ばれるではありませんか。矢張り誰でもパンの問題は第一義なのです。人が皆な聖人にならぬ限り。

石炭の増産に坑夫の優遇法が考へられてゐるのは何の故でせうか。學生が學校を選擇するのは、自己將來の利益からではありませんまいか。實業學校を増設する程その必要を認め乍ら、上級校に行けぬとなると必ずや中學志望者が増加するでせう。

師範志望者が少ないのは何故ですか、醫學士が都會に集中し、地方に醫者のない村が出来る事實は何故でせうか。國家財政の急を百も承知の役人が、在官中以上の高給を以て會社入りをしながら、今日まで一人でも恩給を辭退した者があるでせうか。

醫師の取締りが強化されると、醫科大學の志願者が激減する。利潤が減じて儲からなくなる
と、工場は損な品物は作らなくなる。國家有用の大政治家と自分の子である嬰兒が溺れんとして
ゐる時、人はその何れを助けんとするでせうか。

利己は農夫のみならず、人間共通の本能ではありませんまいか、この人間性を無視して一切の政
策は圓滿に行はれますまい。まづ人間性を變へる道徳運動が第一です。近頃は體力のみ重視して
ゐますが、精神的な人間の品種改良運動が必要です。

全文は實に以上の通りである。この兩様の意見を彼我對照して一讀せらるれば、別に註釋を加
へる必要もなく、讀者は自ら其意の存するところを感得せられることであると信ずる。

只だ一言蛇足をつけ加へるならば、私が斯くありたし、斯くあるべきだと彼岸を指さしてゐる
に對して、無名氏は斯くの如し、斯くありと此岸を踏んでゐる。更に身近かに言ふと頭上と脚下
の相違であり、現實と理想の相違であり形而上下の問題である。

次に私は非常時下の態勢を述べたに對して、無名氏は平時態勢をもつて置き替へやうとしてゐ
る。この二つの點がまづ根本的に相違してゐるのである。

事業問題としては、無名氏の述べられた通りであり、私が農夫に懇求するところも、その事實があるが故である。然し非常時なるが故に、その平時的現實を打破して、理想に生きて貰ひたいと念願するものである。

無名士の言の如く、現實を以て總ての規準となし、多數の赴くところを以て正しとするならば、恐らく人類社會は遂に進化の道を杜止するに至るのではなからうか。進化は現實を超越し、多數と向ふところを異にするところに進路を發見することが多いのではなからうか。

又パン問題を以て第一義なりと無名氏は強調してゐる。然し人はパンのみにて生きるものにあらずとも言ふ。パンを追ふに急なるものは理性を失ひ、理念を失ふもの往々である。パンのみに生くるのは敢て人類の特權とは言ひ得ない。何んとなれば獸類に於てもよくその目的を達成し得るからである。

要するに一人の暖衣飽食を許さず、一人の餓死もさせないと言ふよりも、全國民は一人残らず有難い陛下の赤子である以上、一人の不患者も出してはならぬと言ふことが、私平素の理念であり、又これが我國民の眞髓であり、國體の精華であることを堅く信じて疑はないものである。

認識を新にせよ

米國政府は極東に在留する米國人の引上げを訓令し、既に我國よりは殆んど全部の婦女子や小兒の引上げを完了した。又最近に於ては米國大使館では重要書類を焼却したと云ふことも公然傳へられて居る。此等は何を意味するか、一般國民には別に大した刺戟を與へて居ない。不思議と云ふ程平氣な顔をして居る。

蘭印に使節を送る公表をしたのが、既に半年程の昔である。使節の顔ぶれも二三度變つて、小林大臣が其任に當り二ヶ月もかゝつて小供の使でお祭りに歸つて來た。小林大臣で出來なかつた談判が芳澤大使で出來るものであらうか。悠長な蘭印當局と一口に片付け得るか、事實相手は蘭印ではなく英米である。疾くの昔に先手を打たれて居る氣がしてならない。

泰國は滿洲事變以來公然と我國に好意をよせて居る國である。今日我國は佛印に駐兵して支那事變に重要な地點を獲得して居る。此事件は泰國と重大な關係に立つことは火を見るよりも明らかである。我國は泰國に向つて何事かを工作したであらうか、此處でも英米は先まわりをした様な

氣がしてならない。滿ソ國境には莫大な軍備を待機せしめて居る。此を他の方面に轉向せしむることが出来ないものか、勇躍して赴任した建川大使の消息は此の頃は消えてしまつた。三國同盟は景氣が好いが歓迎しただけでは何物にもならない。支那の新政府を承認して條約を結んだが、國民は知らぬ顔をして居る。

かく見來たらば今我國は東西南北の何れの方角に向つても非常な難局がある。一刻も猶豫を許さぬものがある。然るに上下國民の時局認識は全く不足なりと慨嘆せざるを得ない。我國には事變と共に國家總動員と云ふ戰時體制がある、國民精神の緊張、貯蓄の奨励、生産の擴充、物價の調節、物資の集散等に戰時對應の國策が其れである。此國策は果して遺憾なく遂行されたか、過去二ケ年間に經濟警察即ち闇の問題に抵觸したるもの七十萬件に達して居る、銃後の國民將に慚死すべきにあらずやである。

然るに今又新奇に新體制と云ふものが生れ出た。有馬伯の説明によると新體制運動は具體的ではないが、餘程以前から其兆候があつて今回の事變は之に拍車をかけたとして居る。然らば新體制は戰時體制に代つたのであるか、將又戰時體制に便乘したのであるか其邊の説明がない。

近衛公の説明によると新體制は新なる國民組織である、此が完成は至難の事に屬するとして居

る。國家を第一義に置く點に於て此國民組織には何人も異論がある筈がないが、間髪を入れざる國家の危機に於て完成至難の國內問題に上下を擧げて没頭し、鹿を逐ふもの山を見ずの刻下の狀勢に、私は至大の不安を感じる。

事變以來三年有半内閣は四回目で何れも弱體で、未だかつて國民の血を湧かす勇氣と決斷の示されたことがない。而して國家が未だ微動だもせずして此長期戰に堪へつゝあるは、畢竟我國民の卓越優秀なる爲に外ならない、當局者は此國民の指導を誤らない様にしてもらひたい。邪道に導いてはいけない、國論を割らない様にして欲しい。新體制と戰時體制とをこんがらがない様に一元に導いてもらひたい、議論や會議のみは臣道實踐ではあるまい。(一五・一一・一一)

(本稿は讀賣新聞に投稿し、治安に妨害ありとて當時掲載を禁止せられたもので、五部をタイプライターにて叩き、眞崎甚三郎大將、徳富蘇峰先生、末永一三氏、中村房次郎氏に送られたものである。)